

## ヨーロッパ野外博物館会議 (AEOM) 参加報告と スカンセン (Skansen) について

早川典子\*

### 目次

- 1 はじめに
- 2 AEOMについて
- 3 12年後のスカンセン
- 4 おわりに

キーワード 野外博物館 SDGs スカンセン 動物園

### 1 はじめに

江戸東京たてももの園は、1993年（平成5）3月28日に開園した野外博物館である。両国にある江戸東京博物館と同日にオープンした。最初の計画では、都内に残る歴史的建造物の収蔵を目的とする「野外施設」は、江戸東京博物館と同じ敷地内の併設施設として計画され、独立した野外博物館は想定されていなかった（『東京都江戸東京博物館建設懇談会報告書』1982年（昭和57）11月発行より）。1985年（昭和60）10月に、江戸東京博物館の建設予定地が両国に決まると、面積等の制約などから「野外施設」は分離して、独立した野外博物館として小金井公園内に建設することとなった。

文化財建造物として保存する目的で、茅葺き屋根の民家を移築する事例は、日本各地で行われていたが、1956年（昭和31）に作られた日本民家集落博物館（大阪府豊中市）は、複数の民家を移築し、意図をもって配置され、日本最初の民家を移築した野外博物館となった。服部緑地に飛騨の合掌造りの民家を移築したことが設立のきっかけだったという。

また、1965年（昭和40）に設立した博物館明治村（愛知県犬山市）がある。設立の契機としては、明治期の洋風建築の保存から始まっている。収集対象は、東京をはじめとする全国各地から、また時代区分としては大正・昭和も対象とし、近代化遺産や鉄筋コンクリート造の建物の部分的な移築など、事例が豊富な施設となっている。

北海道開拓の村（北海道札幌市）は、1983年（昭和58）の設立。北海道百年記念事業として進められ、開拓の歴史に関する建物を北海道中から収集している。

\*江戸東京たてももの園学芸員

野外博物館として後発の施設である江戸東京たてももの園は、先行するこれらを参考にしながら、収集、展示がすすめられていったといえる。

## 2 AEOMについて

ICOM（国際博物館会議）の下部組織として、AEOM（Association of European Open Air Museums ヨーロッパ野外博物館会議）という組織がある。ICOMと同様に、数年に1回は会議が開催される。ヨーロッパにおける野外博物館の活動を先導する組織であり、野外博物館に関する科学的、技術的、実践的、組織的な経験を共有し、野外博物館の活動を広く啓蒙することを活動目的としている。

2022年には記念すべき第30回目のAEOMが、スウェーデン・ストックホルム市内にあるスカンセンにて開催されることになっていた。スカンセンは、1891年10月11日に開館した世界最古の野外博物館である。民俗学者アルトゥール・ハーツェリウス（1833～1901）が設立した。【写真1】



【写真1】スカンセンの中を歩くクジャクとAEOM開催中の看板

わたくしは、文化庁による「令和4年度ミュージアム専門職員等在外派遣事業」の助成金を得て、今回AEOMへの参加が実現した。第30回会議のメインテーマは「野外博物館におけるSDGs」であった。今回この会議には、21か国、42施設の野外博物館から116名がスカンセンに集まった。ヨーロッパ諸国、北米からの参加が中心で、わたくしはアジアからの唯一の参加者となった。

スカンセンの中にある“Höglöftet”という建物の中でメインカンファレンスが開催された。この建物は、1901年にスカンセンを博物館として運営するにあたり必要な管理施設として建てられたホールである。ウロコが取り付けられた外観の木造2階建て、建築家によって設計されたこの建物は、すでに歴史的な建物になっており、素晴らしい空間である。古いガラスのシェードにはLEDの電球が取り付けられ、会議場としての照度を保っている。【写真2】【写真3】【写真4】



【写真2】 1901年に建てられたホール



【写真3】 ホールで使われているLED電球



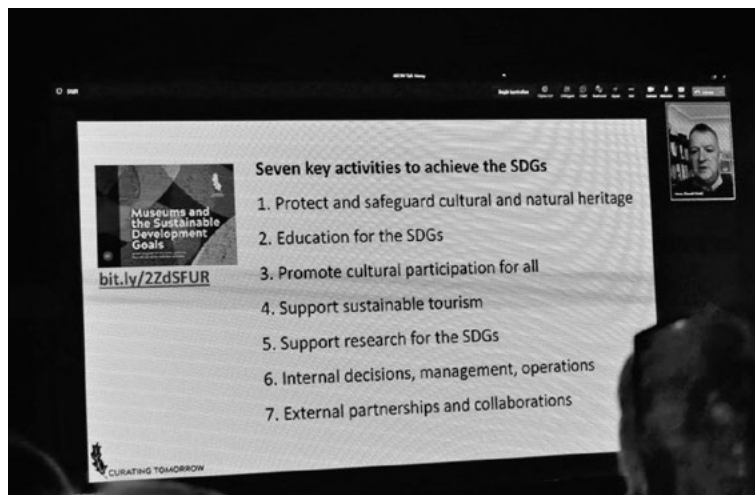
【写真4】 スカンセン館長による開会挨拶

メインカンファレンスでは、基調講演、会員館の事例報告、小テーマ別の分科会、スカンセンの活動の見学プログラムと続く。

最初の基調講演は、ICOMサステイナビリティ・ワーキンググループメンバーであるヘンリー・マクギー氏による「ミュージアムと持続可能な開発目標—ミュージアムの役割を政治から仕事の文脈に変換すること」“Museums and the Sustainable Development Goals - translating the Museums’ Role from the Political to the Work Context”であった。氏の発表の要約は以下のとおりである。【写真5】

19世紀末に野外博物館が設立される契機として、工業化、自動化、都市化によって、多くの人々の生活が変わっていくことに対する危惧があった。野外博物館の設立者たちは、伝統的な工芸、風俗や農村が都市化によって消えていくことを憂い包括的に保護してきた。このような野外博物館の歴史を踏まえつつ、今後、野外博物館において「SDGsを実現するための7つの重要な活動」は、以下のことが挙げられる。

- 1 文化遺産・自然遺産の保護と保全
- 2 SDGsのための教育と学校などへの支援
- 3 すべての人の文化的参加を促進する
- 4 持続可能な観光への支援
- 5 SDGsのための研究支援
- 6 博物館内部での意思決定、管理、運営
- 7 外部とのパートナーシップとコラボレーション



【写真5】ヘンリー・マクギー氏発表のようす

世界最初の野外博物館であるスカンセンは、2022年の現在も、これらをすべて実現していることで、世界の野外博物館の先頭に立つ理想的な施設である。

スカンセンでは、設立当初から、スウェーデン在来の動物の保全にも力を入れており、特に、2019年4月にオープンしたスカンセンの最新の施設、「バルト海科学センター」における自然の保護と研究の取組は素晴らしい。ここでは、わたしたちの行動がバルト海の未来にどのように影響するかを知ることができる。

また、学校に出向いて出張授業や、学校教育でスカンセンを訪れる学校に対する特別プログラムが充実しているが、SDGsの教育支援という観点から見ても、素晴らしい。また観光施設としてもトップクラスで、設置された屋外のステージでは多くの集客をすることも可能であり、持続可能な観光施設という面も優れている。

博物館のスタッフにSDGsを優先して取り組む考え方が浸透しており、何に力を入れて、博物館として運営していくべきか、優先順位の付け方もスカンセンはトップクラスである。【写真6】



【写真6】スカンセンでの取り組みについて

野外博物館で働くスタッフは、エネルギーを使うことや、廃棄物を出すこと、施設内での商業活動についても、日常的に考えていくことが重要である。

野外博物館で働くスタッフは、

- ・自分の仕事はどこに違いをもたらすかを理解すること。
- ・持続可能な開発に対するハイレベルなコミットメントを持つこと。
- ・計画性と限られた資源。
- ・幅広い人々やステークホルダーに常に開かれた報告をすること。

これらについて、常に意識するべきであるが、最も重要なことは、自分自身がコミットメントすることである。

会議の始めにこのような講演を聞き、まずは2022年SDGs達成ランキングで世界3位のスウェーデンならではの取組だと驚いた。わたくし自身の博物館での業務でのSDGsに対する意識は、もっと漠然としたものであったからである。なお、日本は163カ国・地域のうち19位である（“Sustainable Development Report 2022” 国連資料より）。

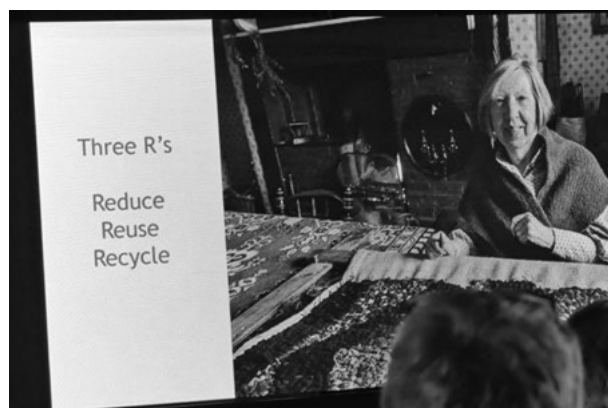
次の講演は、イギリスにあるビーミッシュ・リビングミュージアムのサステナビリティ・マネージャーであるリサ・ウィルキンソン氏であった。タイトルは「よりサステナブルになるためのわたしたちの旅」“Our Journey to be more Sustainable”であった。ビーミッシュ・リビングミュージアムでは、サステナビリティ・マネージャーという役職があることを知った。そして、サステナビリティについて、毎年の目標を設定したうえで、達成度を確認しているとのことであった。

具体的には、以下のような取組である。

- ・博物館での短期的、長期的な目標を理解すること。
- ・持続可能性の知識と能力を創造すること。

- ・職場の仲間たちと持続可能な実践を共創すること。
- ・博物館の内外でサステナビリティ状況を可視化すること。
- ・変革的な変化を生み出すことによって、より高い目的をアピールすること。
- ・非効率的なエネルギー慣行や廃棄物削減のためのアイデアを出しあうこと。
- ・持続可能性が私たちの調達方針の最重要事項であることを確認すること。

ただし、多様性とは、それぞれの価値観や、ゴールが違っていてもいいという考えに基づくものであることを忘れてはいけないということを最後に付け加えていた。【写真7】



【写真7】 ビーミッシュリビングミュージアムにおける3つのR

カンファレンスの中で、とても印象的な講演として、オランダを中心にヨーロッパで活動している非営利組織ヨーロッパミュージアムアカデミーのディレクターであるヘンリック・ジプサーン博士の「持続可能な時代における野外博物館ならではの前提条件について」“On the Special Preconditions for Open Air Museums in Times of the Sustainability”を挙げる。ご本人からの許可を得た上で、引用する。

【写真8】



【写真8】 ヘンリック・ジプサーン博士の講演

20世紀には多くの大きな変化があり、その大きな変化をもたらすためには多くの複合的なプロセスが必要であった。そのひとつは、人々が共感できる物語の創造であり、ヨーロッパの一部でその立役者となったのが野外博物館という装置だった。なぜ野外博物館が新しい大衆の物語のためのスマートで効率的な道具になったのかという問いに対する答えは、これまでの議論にもたくさん出てきている。ここでは、野外博物館が、本物であることを主張する実物大の三次元構造物として、来館者に既存の能力をほとんど要求しない体験を提供したことにだけ言及する。

野外博物館は過去の普通の人々に関する普通の物語を現代の普通の人々に伝える。来館者が共感できる物語を共有することで帰属意識を高めることが、19世紀後半から20世紀を通じて野外博物館が目指してきたことであった。

このような物語を批判的に見れば、ヨーロッパの野外博物館の多くに共通する特徴が見える。ひとつは、博物館が活動する場所との結びつきである。このことは、国や地域のプライドを刺激し、場合によっては排外主義に近い傾向を助長する。この点については、野外博物館の創設に率先して取り組んだ先駆者たちに責任があるだろう。彼らの博物館設立の原動力は、まさに国やその地域の誇りと、自分たちが経験した変化への対応であっただろう。

ふたつめとして、ミュージアムで視覚化できるようなストーリーを作るために、物事を単純化することの副作用として、過去をロマンチックにする傾向があることである。非常に詳細なストーリーテリングは、博物館が伝えたいことを完全に消してしまうことがほとんどであるため、この副作用を中和することは困難である。

21世紀は、最初の世代の野外博物館が設立されたときの世界とは、今のところ大きく異なっている。気候や環境の危機、移民の増加、民主主義に対する脅威などの課題に直面し、世界ははるかに小さくなっている。ある場所での課題は、他の場所での課題と明確に関連している。国連の「持続可能な開発目標」は、気候、民主主義、移民といった異なる課題が相互に関連し、グローバルに展開されていることを示す例として見ることができる。

博物館という施設は、来館者から信頼されている。ある調査によると、人々は博物館を医師や自然科学者と同じトップレベルの信頼度に位置づけているという。博物館に対する国民の信頼は、驚くべきものであり、私たちの最も貴重な財産である。

野外博物館は、これまでの発展にうまく適応してきた。今日、ヨーロッパの野外博物館を訪れると、私たちは多くの野外博物館で、16世紀から20世紀までのいろいろな時代にタイムスリップした体験をすることができる。わたしは歴史家としてこれらの環境を批判的に見ると、博物館が展示するものを取捨選択するだけでなく、ストーリーを編集し、雰囲気や感情を乱すようなものを取り除いていることがよくわかる。もちろん、そうでなければならない。確かに、博物館は明確なメッセージを持つためにストーリーを編集する必要があるし、博物館はあくまで責任ある編集者であり、自由にストーリーを語るべきだ。もちろん、博物館は博物館に対する社会の信頼が揺るがないように編集を行う。

19世紀から20世紀の前半には、石炭、石油、ガスを暖房や電気のエネルギー源として使用することに問題を感じていた人は、ほとんどいなかっただろう。17世紀から18世紀にかけては、薪や泥炭を使

用する際に起こりうる気候上の問題についてほとんど何も分かっていなかった。水車は魚が通れるような構造にはなっていなかったし、風車は鳥の生態系を乱した。【写真9】

野外博物館では、このような過去の問題とどのように向き合うべきであろうか。多くの野外博物館が、古い農場や工場など、過去のものが歴史の中で間違った方向に進んでいたことを展示することはないのではないだろうか。例えば、鉱山の歴史を紹介する野外博物館では、鉱山労働者とその家族の社会生活に焦点を当てても、鉱山そのものや再生不可能なエネルギー源の採掘にはあまり焦点を当てていない。また、ほとんどの野外博物館は、古い時代の農村の生活、つまり農業を中心としたストーリーテリングとしている。工業化以前の伝統的な農業では、動物福祉に多くの問題があり、20世紀の大部分において、それが改善されなかったことは確かである。

野外博物館がSDGsの実現に向けた取り組みにおいて興味深いものであると認識されるためには、この問題を無視することはできないと思われる。歴史的に古い農業は、化学的・技術的な手段を用いないからと言って、必ずしも持続可能とは限らない。もう少し直接的な言い方をするならば、野外博物館は調和を図るのではなく、過去の環境問題をもっと正直に、オープンに伝えるべきなのではないだろうか。来館者の問題意識が高まるにつれ、博物館が信頼に足る存在であるためには、来館者にさらに向き合うことが不可欠である。

野外博物館は学ぶ場として素晴らしく、効率的である。また、野外博物館が伝えるものに対する信頼度は概して高い。このことは、野外博物館がSDGsの実現に重要な役割を果たすための最良の前提条件を与えるはずであろう。【写真10】



【写真9】 スカンセンに展示されている風車



【写真10】 ヘンリック・ジプサーン博士への質疑応答のようす



この講演は、ややもすると「昔はよかった」というような、懐古主義に陥りがちな野外博物館において、基本に立ち返り、過去を語るときに必要な視点を提示する有意義な講演であった。歴史系博物館で展示を担当する者であれば、多かれ少なかれ経験があるはずの「ストーリーとして編集した歴史」を展示するときの重要な問題としても、大いに刺激を受けた。

このほか、野外博物館とSDGsに関する事例紹介は、ドイツのヘッセンパークオープンエアミュージアム、ルーマニア国立ヴィレッジミュージアム、ハンガリー国立オープンエアミュージアムなどが続いた。また、建物の復元や保存に関する講演もあり、建築文化の違いを知る上でも、興味深いものであった。

### 3 12年後のスカンセン

2010年夏、わたくしは美術館連絡協議会による「海外研修派遣制度」の助成を得て、2010年7月下旬から5週間にわたってスカンセンにて研修をさせていただく機会を得た。この内容は、「野外博物館スカンセンでの研修報告」(『東京都江戸東京博物館紀要』第1号 2011年3月発行)にて報告している。

再びスカンセンの各所を見学して感じたことを紹介する。まず12年前に、リル・スカンセン(小さなスカンセンという意味)という新しい動物園棟を検討していることを2010年の研修報告でも紹介しているが、2012年に完成し、この施設の開館10周年の節目を祝っていた。【写真11】【写真12】

動物園といっても、日本の一般的な動物園のように、ライオンやトラ、象などもともと国内にいなかった動物を見せる施設ではなく、農家の庭先にいたような家畜や、在来の動物を展示している。それに加えて、トナカイやクマなど、スカンジナビアの動物を積極的に保護している。この新しい動物園棟は、子ども向けの施設ということもあるのか、トイレには男女の区別がなく、男女双方が使用し、広い個室が確保されていた。【写真13】

2019年4月には、バルト海サイエンスセンターという水族館がオープンした。持続可能な社会のために、海と海の資源を守るというSDGsの目標にも合致している。スカンセンは、ストックホルム市内の唯一の動物園であるという大きな役割を担っている。大きな水槽に泳ぐ魚やクラゲを見るだけでなく、バルト海を知る展示コーナーや、研究施設、ワークショップスペースも充実している。【写真14】

2010年にスカンセン館長のジョン・ブラットミュール氏にインタビューした際は、建物の移築事業は、10年に1棟程度を継続していきたいという計画を聞いていたが、この間、新しい建物は増えていない。しかし移築事業を終了としているわけではない。優先順位をつけているのだろう。

また、この10年間では世の中ではさまざまなデジタル化が進んでいるが、スカンセン内のデジタル化進捗状況は、エントランスの入園料表示がデジタルサイネージになっていたことと、建物の既存の解説板にQRコードが追加で取り付けられ、より詳しい解説については、ウェブサイトへ誘導していたことくらいである。館長は、「当館は古い設備のまま、人を活用しながら、新しい展開をしていく方針である。ハイテクノロジーは使わない」という方針を話していたが、その方針が変わっていないことがわかる。【写真15】【写真16】



【写真11】 リルスカンセン10周年



【写真12】 ウサギの体験型展示



【写真13】 リルスカンセンの広い個室トイレ



【写真14】 バルト海サイエンスセンター外観



【写真15】 QRコード表記のついた解説看板



【写真16】 エントランスのデジタルサイネージによる料金表

施設の収益性を高めるためには、レストランやカフェ、あるいはミュージアムショップでの商品開発などに力を入れることは、日本の博物館・美術館ではよく取られる方法であるが、スカンセンでは、変わらずに古めかしい屋台で、簡易な軽食を売っており、あまり広いとはいえないレストランでスウェーデン料理を食べられるなど、12年前からあまり変わっていなかった。展示されている昔ながらのパン屋では、スウェーデンの伝統的なシナモンロールや、焼き菓子を売っているが、支払いはキャッシュレス決済のみ、そのギャップも楽しかった。

ミュージアムショップでは、伝統的な布製品や、自然素材の工芸品のほか、古い建物で使われる、昔からの建築金物や塗料なども扱っており、古い家に住んでいる市民がここで買い求めることもあるという話であったが、それらの品揃えも12年前とあまり変わりはないようであった。また、コロナ禍においては観光需要が激減し、スカンセンの経営も危ぶまれたが、過去になかった年間パスポートにあたるようなチケットを販売して、市民から多くの支援があったという。

2022年にスカンセンは開館131年目を迎え、ストックホルムの観光名所として多くの来館者を得て、変わらずに市民から愛されている姿を間近に見ることができた。そして今回は初めて秋のスカンセンを訪問したことで、農家の囲炉裏の暖かさに感激し、寒い冬を迎える住まいの工夫を実感することができた。

【写真17】 【写真18】 【写真19】



【写真17】 農家の囲炉裏とコスチュームを着たスタッフ



【写真18】 植物で糸を染めているスタッフ



【写真19】 屋外で染色のために植物を煮ているようす

#### 4 おわりに

博物館学の棚橋源太郎(1869-1961)は、スカンセンを日本に紹介し、また日本民俗学に影響を与えた澁澤敬三(1896-1963)は1922年にスカンセンを訪問している。さらに、建築史家藤島亥治郎(1899-2002)は、1926年から2年間欧米に留学した折にスカンセンを訪問し、1938年に雑誌『住宅』に記事を書いている。建築学者今和次郎(1888-1973)は1930年の夏にスカンセンを訪問し、『国際建築』1934年6月号に記事を書いている。スカンセンを訪問し、紹介しているのは、建築関係者が多いこともあり、日本では野外博物館(Open air museum)は建物を移築・収集した博物館であると考えられてきた。

しかし、ヨーロッパにおける野外博物館では、農家の展示では、当時の衣服や、庭の植物、鶏や馬などが、一体として展示されていることが多く、野外博物館においては、「建物」「植物」「動物」「衣服」「食べ物」などは総合的に野外博物館を構成する重要な要素であるという共通理解がある。ヨーロッパ中の野外博物館を訪問することはなかなか難しいが、AEOMのような場で、各国の野外博物館の事例を数多く知ることができる機会は大変貴重である。

ひとつの住宅を移築し、台所、便所、寝室など人間の住まいに欠かせない部屋をしつらえ、部屋ごとに住まい方や暮らしぶりを展示している野外博物館。これを、会議の中でヘンリック・ジブサーン博士は講演の中で「民俗学者アルトゥール・ハーツェリウスの発明である」と表現したが、言葉がわからなくても、住まいや暮らしを理解できる最良の方法である。人々が相互理解をする手助けにもなる。

わたくしは自分自身の野外博物館での業務のうち建物の維持管理や施設内の安全対策、より魅力ある展示等については興味関心を広げてきたつもりであるが、このような場に出席することで、広い視座を得ることができ、身が引き締まる思いであった。セッションの合間に入るコーヒープレイクでは、セッションの感想を話し合うことができ、また会議後にも十分な時間が取られ、個人的な人脈を築くこともできた。

まずは、このようなヨーロッパの野外博物館の先進的な取り組みを広く日本で紹介することによって、日本の野外博物館のさらなる充実につながるよう努力していきたい。